

Title	湘淮両派閥の闘争と清仏の越南交渉
Author(s)	彭, 澤周
Citation	大阪外国語大学学報. 10 p.103-p.125
Issue Date	1961-10-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80191
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

湘淮両派閥の闘争と清仏の越南交渉

彭 澤 周

目 次

1. はじめに
2. 派閥斗争の由来
3. 越南問題についての論争
4. 曾紀沢の対仏政策
5. 李鴻章の妥協外交
6. 宗主権問題をめぐる国際情勢
7. むすび

はじめに

1881年清仏両国間に越南問題が紛糾すると、フランス政府は、1874年に越南で獲得した権利を主張しつつ、清越間の「宗主」関係を否定し、越南全土を占領しようと考えた。この紛糾は、フランスをして侵略行為にかりたてたばかりでなく、清国内においても湘淮両派閥の間にはげしい論争を惹起せしめた。本論文は、まず湘淮両派閥の斗争経過を略述したうえ、フランス政府の対清方針、および主戦派の湘派と和戦派の淮派それぞれの主張を分析批判し、清仏戦争の性格に対する理解を前進せしめることを、目的とする。

派閥斗争の由来

湘淮両派の斗争は清仏戦争期に明確となったが、両派の間における矛盾は早くも太平天国滅亡の前夜にあらわれている。曾国藩は1852（咸豊2）年湖南省長沙で「団練」を行ったがこれは同郷・友人・師弟などの関係により湘軍を募集したものであり、濃厚な郷土的色彩をもっている。後に李鴻章が淮軍を集めた時も同様の方法を用いている。両軍は私人名義で募集されており、当時、軍隊募集を行うものは、その軍隊の指揮権をえた。したがって私的軍隊の悪風が発生した。封建的社会において、軍事権を握っているこれら湘淮両軍閥は、名利の追求を重視していた。平時においては彼らは友好関係を維持していたが、一旦権力を獲得すると、その本心をさらけだした。1864（同治3）年初夏、洪秀全は金陵で湘軍に囲まれたが降服しようとしなかった。長期にわたる包囲にもかかわらず金陵を破れなかった曾国荃の軍功を急ぎ、李鴻章をし淮軍を率いてこ

れを助けさせようとした。しかし李鴻章は自己の軍隊を維持するため、言を左右にして協力しようとしなかった。¹⁾ このことは湘淮両派の不一致の萌芽を物語っているものといえよう。しかし、当時、曾国藩は金陵を攻略できないことを恐れ、李に助けを求めざるをえなかった。しかも一方、もし李に助力を求めるならば、李の名声が彼ら兄弟のそれを凌ぐことを恐れていた。このような名利をのみ計る矛盾した心理は、1864年5月25日および6月15日に彼が曾国荃に宛てた手紙の中に表われている。

「今、少荃^{李鴻章のあざな}は、2年来たびたび偉功をたてて、全江蘇を肅清した。我々兄弟の名声が減じたとしても、なお全く地に落ちるに至らないのは、家門のおかげだ」（5月25日）。

「君の此度の返信によれば、上奏するとともに、書信で少荃にはかり、急速南京に赴くよう要請したそうだが、もし蘇軍^{李鴻章の軍隊}が来て成功すれば、苦労したのは君で、名声を博するのは少荃なのだ」（6月15日）²⁾

1862（同治元）年曾国藩は李鴻章にすすめて上海に行かしめ、江蘇巡撫を受けつがせた。当時、淮軍は英米資本主義国家の援助をえ、また一方では太平軍の内訌が幸いし、大きな損害をうけないで、蘇州・常州一帯の太平軍を破った。こうして李の名声はこの軍事的勝利によって高まり、一世を風靡する觊があった。金陵を破った後、曾国藩は一部の腐敗した湘軍を解散し、捻軍平定を李鴻章にまかせようとした。彼は、

「いま、湘軍は強弩の末で、鋭気は全く消滅し、その力は捻軍を制圧するに足らず、将来両淮の平定には、ぜひ貴下の淮軍が当たってもらわなければならない」³⁾

といった。この時、数万の捻軍が山東・河南一帯で活動しており、はなはだ優勢であった。僧格林沁が戦死して、清国政府は曾国藩を欽差大臣とし、捻軍平定を指導させ、李鴻章を两江総督とし軍糧をととのえさせた。しかしこの時、淮派は湘派の捻軍平定権を奪うため大いに策動し、曾国藩は淮軍を制御しきれなかった。彼は李に向って言明した。

「われわれ兩人は、捻軍の掃蕩を、われわれ両家の私事のように考えるべきです。沅甫^{曾国藩の弟}は湖北に着任後、襄陽に駐劄して、出境討伐することを決めており、もし六七月して少しも好転の様子がなければ、^{わたかし}国藩は、閣下が北征して捻軍を掃蕩されるよう奏請しよう。私は乗馬して督戦することができないが、閣下は馬上で統率がおできになり、一二度の号令だけで、士気が振うこと百倍だからです。その時に、もし閣下自身奏請され攻防の時流を凌ぐ季泉君^{李鴻章の弟}に、出馬して単独で一方を担当してもらうようにすれば、^{わたかし}国藩は陳請これつとめましょう。これは私の微意に出ずるもので、御兄弟に無理なことを強いるわけではなく、捻匪は淮軍でなければ滅すことができず、かつ淮軍は貴家でなければ統率できぬことが明きらかだからです」⁴⁾

これは勿論、彼に捻軍平定の實力がなく、李氏の兄弟にこれを委ねようとしたのであるが、また

他方から考察すると、淮派の勢力が強大であり、湘派はやむなく舞台より退いたといつてよい。曾国藩は1866（同治3）年冬、病気を理由に辞任し、欽差大臣の地位を李鴻章に譲った。その後淮派は湘派を圧倒し、李鴻章の官位もまた飛躍的に上昇し、まもなく直隸総督兼北洋大臣となった。

軍閥の特性は、軍事権により自己の地位を固めた後、政治の上にも独裁政権をうちたてることにある。李鴻章はすでに淮軍の武力を後盾としている以上、政治上の権力も安泰であった。1870（同治9）年、曾国藩は「天津教案」の処理に失敗し、名声は地に落ちたので、李はその機に乗じてこの「教案」を順調にまとめ、ますます世人の注目をあびるに至った。当時、清国の凡庸無能な官僚たちはみな李を軍事家・政治家であるのみならず、外交家でもあると認めた。欧米資本主義国家も、また李を当時清国におけるただ一人の交渉相手であると考えていた。

かくて、湘派の勢力は振わなかったが、左宗棠、曾国荃、彭玉麟、郭嵩燾、曾紀沢らはなお強大な実力をもち、淮派の主張を牽制することができた。両派間の矛盾は軍功の争から始ったが、後には政治と外交の面にまで及んだ。1878（光緒4）年、清露間に伊犁問題が発生した時、湘派は淮派に打撃を与えるため、李鴻章の妥協的外交を攻撃し、ロシアに対して強硬な態度をとることを主張した。曾紀沢がペテルブルグに行き、伊犁問題を円満に解決し、外交上大きな成功をおさめ、名声は急激に高まった。これ以後湘派は体勢をたてなおし、清仏戦争の時期に至つて、両派の矛盾は更に尖鋭化した。

注

- (1) 「李文忠公全集朋僚函稿」5巻、19頁
- (2) 「曾文正公家書」4巻
- (3) 「曾文正公書札」13巻、90頁
- (4) 「曾文正公全集書札」13巻、34—35頁

越南問題についての論争

曾紀沢は伊犁交渉をまとめた後、ペテルブルグからパリにゆき、久しく懸案となっていた清仏間の越南問題をも合理的に解決しようとし、フランス外務省に対し、越南は清国の属国であり、1874（同治13）年3月フランスが越南を脅迫して調印せしめた仏越和親条約は認めないと言明した。こうして清仏間の越南問題はまたもや論争の対象となった。越南はもと清国の属国であったが、フランスはアジアに侵入して以来、越南を占領して基地とし、清国西南各省に勢力をのぼそうとした。当時雲貴総督であった劉長佑も彼らの陰謀を見破り上疏していう、

「フランスは越南を渴望すること久しく、西貢に市場を開いて、その要衝を占め、同治11年には、賊將黄崇英と通じて、東京奪取をねらい、兵を集めて合議し、洪江を渡って諒山などに侵攻しようと考え、さらに越南の割譲をのぞんで、広西境界600里の地に駐軍しようとした。…

……フランスの意図は、越南全域を奪取するにあること疑いなく、これを得た後は、或に蒙自などに領事を置いて、鉞山開掘の利権を奪おうとするか、四川・広東に道をとって江漢地方に通じて、ヨーロッパ諸国の貿易港の上流を占めしようとするかして、その奸計は止まるところを知らないだろう」¹⁾

この上疏によると、劉長佑は資本主義国家の侵略について、相当の認識をもっていた。越南の西北部には富良江（紅河）があり、清越国境の保勝を経て雲南省の蒙自・元江に達することができる。当時この川は交通上、軍事上、非常に大きな重要性をもっていた。しかもその上流には貴重な鉞物資源を埋蔵している。²⁾ フランスはもしこれを占領できると莫大な利益を獲得できる。しかし、富良江の上流には天地会の残党劉永福の黒旗軍が割拠しており、仏軍は西北に発展を試みる度に打撃をうけていた。したがって、清仏交渉の際には、越南の宗主権のみならず、黒旗軍の存在もまた両国の論争の焦点となった。フランスの越南侵略は相当以前から計画されていたものであった。1881（光緒7）年7月、フランス政府は東京における海軍力を増強するため、250万フランの予算を計上し、まもなくフランス首相シャルメル・ラクール（Challemel-Lacour）は議会において植民政策は同国に対して必要であると宣言し、つづいてフェリー（Jules Ferry）³⁾ 内閣はこの原則によって清国と交渉した。⁴⁾ かくて越南問題は解決がつかず、非常に長引いた。

中国の近代外交史を見ると、清国政府と列強との交渉は、戦わずして和し、或は、先ず戦ってしかる後に和していることが明瞭に看取されるが、ただ越南交渉の時だけは一方では戦いをつづけながら、一方では和議を進行せしめている。どうしてこのような特殊な情勢になったのだろうか。根本的にはこれは湘淮両派の対仏交渉上の矛盾といえよう。

両国の越南交渉は前後5年ほどにわたり、交渉の経過も複雑極まるが、大局的には三つの段階に分けうる。第一段階は1881年曾紀沢がフランスに向って越南は清国の属国であると声明してから、翌年の秋フランス公使ブーレエ（F. A. Bourée）と李鴻章との間に行われた講和条約三カ条の成立まで、第二段階はフランス新首相フェリーが内閣を組織し、パトノートル（J. Patenôtre）を駐清公使に任命してから1884（光緒10）年夏李鴻章とフランス海軍司令官フルニエ（Le Commandant Fournier）との間に天津仮条約が成立するまで、第三段階は諒山事変の勃発から英人キャンベル（James Duncan Campbell）が清政府に代ってパリで和平条約を結ぶまでである。三段階を経たこの交渉は非常に長期にわたっており、第一、第二段階の条約はすべて失敗し、ただ最後のパリ条約に至って始めて越南問題は解決せられた。湘淮両派の対仏論争は、時局の進展にともなう緩急の変化がみとめられるが、今その重要な点をかいつまんで下にのべよう。

曾紀沢はペテルブルグからパリにつき、バルテレミー・サンティレール（Barthélemy Saint-

Hilaire)と越南問題について交渉したが、ここで活潑な論争が展開された。当時、曾紀沢は、清政府に上申している、フランスは久しく越南侵略を計っており、清仏交渉はもはや口舌で解決される段階ではない、今や採るべき唯一の方法は辺境の防衛を強化し、南北洋大臣の派閥斗争を水に流し、一致協力して対外強硬政策をとることであり、そうなればフランスも敢えて清国と開戦することはないであろうと。こうして彼は対仏政策七カ条⁶⁾をしたため、総理衙門に実行するよう申し入れたが、不幸にして李鴻章の反対にあい、実現できなかった。後に彼はロンドンから左宗棠にあてた手紙の中で大いに鬱憤をもらしている。

「李鴻章はフランス公使トリクー（Tricou）と越南の件を相談したが、なお結論が出ないと聞く。この事件がいよいよ悪化したのは、『柔』・『忍』・『讓』の三点で誤っているからで、わが国が早く毅然たる態度を示せば、フランス人は必ず軽々しく軍事行動を起こすわけにはゆかない」⁶⁾

もともと、越南の紛糾に対して李鴻章は極力講和を主張していた。彼は、越南北部一帯は地がやせ、民が貧しく、フランスがその地を侵略することは考えられず、しかも彼の指揮する淮軍は気候の劣悪な越南へ出動することは到底不可能であるといっている。

「越の北圻沿辺の諸省は、もともと地味が痩せ、多くの山々が群れつどい、陰阻で守るに易い。雲南の藩司唐炯は、かつて出境してその地域をまわつたが、昨冬、奏上して、『そこは、道がけわしく、気候がわるく、年中瘴癘の気がたちこめているから、フランス人はこの危険を冒すまい』といっている。……私はこれまで淮軍の指揮をしたが、たびたび削減して、残存少く、直隸・江蘇各地に分散して、手不足のおそれある現在、大部隊を派遣することはや困難である。しかも、淮軍將兵は北方出身で、風土のわるい低湿瘴癘の越南には甚だむかない」⁷⁾ 右の主張は、疑いもなく越南の放棄と対仏妥協を暗示している。このような見解に基づく、李鴻章の対仏政策は、常にフランスに対して強硬な態度にでられなかった。曾紀沢のいう『柔』と『讓』とは、彼の妥協的外交を批判したものである。

1882年秋、李鴻章はフランス公使ブーレエと天津で平和条約三カ条を締結し、越南北圻の利益をフランスに譲つたうえ、富良江上流の黒旗軍を撲滅しフランスのために障壁を除いてやろうとした。この条約が成立すると、湘派は大きな不満を表明し、曾国荃は通商、分界の二カ条は慎重に処理しなければ、清国にとつて禍の種となることを強調した。⁸⁾ 雲南総督の岑毓英も、この条約は清国に大きな損害を与えるだろうとして、杜瑞聯と共同している。

「領土の分割はよいが、北圻を割譲することは断じていけない。通商を許可するのはよいが、鉞山の利権を与えることは断じていけない。匪賊の駆逐は行うべきだが、劉永福を駆逐することはいけない」⁹⁾

当時のいわゆる「時局を論ずるを好む清流派」の張佩綸らも李に対し、ブーレと談判した時、彼があまり譲歩したため、それが将来にを危ひき、辺境の維持なども到底困難という意味のことをのべた。¹⁰⁾

李鴻章は列強に対して明確な認識をもたず、ブーレと条約を締結すれば、越南問題はかたづくものと考えていた。実際には、フランス政府は越南の利益を放棄するどころか、その貪欲は寸をえて尺を望むものであった。1882年冬、フランス外務大臣デユクレール(Duclet)は大統領グレイヴィ(J. Grévy)に向って極東に富饒な植民地をえてフランスの優越性を維持すること、すなわち越南侵略を強化することをすすめた。¹¹⁾ 翌年シャルメル・ラクールは外務大臣となり、ブーレの締結した条約を不満とし、この条約は1874(同治13)年フランスが越南で獲得した權益を侵害するものと考えた。そこでブーレを免職し、駐日公使のトリクーを上海に派遣して談判させた。¹²⁾ 清仏交渉はこの時から困難な状態に陥ったのである、

ブーレの締結した条約がフランス政府の拒絶にあうと、越南の情勢はまたもや緊張した。清国政府は淮派およびその同調者の攻撃をうけ、開戦に傾かざるをえなかった。そこで李鴻章に命じて雲南・広東の軍隊を指揮させ、防衛を強化しようとした。李は上海にいて後も、海防は边防より重要であることを理由として、広東に行くのを拒絶した。清国政府はこれをどうすることもできず、彼をしばらく上海にとどめ、全政局を統率させる外なかつた。彼は上海で数ヶ月傍観し、講和しようとしてトリクーと数回に渡って会談した。しかし曾紀沢は彼がまたもやフランスに対して譲歩するのを恐れ、総理衙門に建議して、

「フランス政党は、いずれも無頼の徒であります。譲歩すれば、止まるところを知りませんが、挫けば、その主張はおのずから変更いたします。故に方策を陳述して御採用を待たずにおれないのです。すなわち、暗に越南に軍隊と武器の援助を与えて、フランスがわが国にかなわぬかを試します。当方はますます強硬な態度をとり、彼らの行動を承認せず、軟弱な態度をとらぬがよいようにおもわれる」¹³⁾

このような強い主張に出あい、李鴻章はもはやトリクーに譲歩することはできなかつた。したがって、上海談判からは何の結果もでなかった。

当時、李鴻章はフランスが1871(同治10)年ドイツに敗れてのち、国力充実に全力をそそぎ、植民地を拡張して国際的地位を高めようとしており、もし清国が軍隊を発して、越南を助けるなら平和はくずれ、フランスは必らず艦隊を動かし、天津、大沽、福建、広東、沿海各地を攻撃するだろうし、清国は到底これに対抗できないと考えていた。たとえ、清国が一時勝利をえても、その勝利を確保し続けることはできまい、もし一ヶ所で勝利をえても、各港を守ることはできない。曾紀沢の主張する強硬外交はただフランスのうらみを買うだけである。こうしては、彼清国

政府に建議した。

「これまで、ヨーロッパ諸国が重大事件に遭遇して、駐在公使が処理できない場合には、必ず全権大臣を派遣して交渉させました。将来、フランス政府に転機があれば、時務に明るい大臣を特別に選んでフランスに往き、もっぱらこの事を論議させていただけないでしょうか。併せてフランスの情勢に詳しい委員を一兩人選んで一緒に行かせれば、問題を解決することができるよう」¹⁴⁾

これは、はっきりと曾紀沢がもはや清仏交渉の重任に当れないとして、淮派のいわゆる時勢を知った代表をフランスに派遣して交渉させようとするものである。こうして、彼は越南の事件の処理に対する湘派の牽制をさけ、フランスと外交上の妥協を実現しようとした。しかし、左宗棠は、

「こちらが弱味を示せば、むこうはいよいよつけあがり、こちらが退けば、むこうはいよいよ進む」¹⁵⁾

という状態に陥ることを恐れた。

リヴィエール (Rivière) が黒旗軍に殺されてから、フランス政府は武力で越南を占領しようとした。滇越辺境の情勢は急を上げ、清国政府はやむなく張樹声に命じて、曾国荃に代って両広総督を命じ、淮軍の五營を率いて、広東にゆき軍事を監督させた。張樹声は淮派軍閥の大黒柱であり、和戦についての考えは李鴻章と喰いちがっている点があったにしても、湘派と協力することはできなかった。彼は広東につくと、各地の防備を視察し、曾国荃が一年あまりも総督の位置にありながら、まだ海港の防備を完成していないとして、上奏弾劾した。これは勿論彼が非常に真面目に事態に当ろうとしたことを示すが、他方が湘派を打倒しようとしたと考えられる。軍機処はこの弾劾にもとずいて曾国荃に戒告を与えている。

「張樹声が広東着任後に、海防状態を視察したところ、曾国荃が前に奏上した砲台の増築、漁師の招集などの事は、いずれも実現されていないと奏上しているが、前任者(曾国荃)は一年余も総督の任にありながら、これらの重大事について、どうして何らの処置をも施さず、いたずらに責任のがれのでたらめをいったのであろうか」¹⁶⁾

湘派の中でも兵部尚書の彭玉麟が最も激しく抗戦を主張した、監察御史の光熙はかつて彼に広東の軍事を指揮させるように推薦したが、清国政府はこの意見をまだ採用できなかった。今、曾国荃はすでに解任され、淮派のみが軍事権を握っており、非常に湘派から妬まれていた。しかもこの時、フランス軍は北圻を攻め、雲南巡撫の唐炯は戦わずして逃げ、辺防は急を上げ、清国政府はついに彭玉麟を広東に急行させ、軍を指揮し、危機を収拾させた。彼は赴任の際上奏している。

「該国（フランス）は寸をえて尺を思い、辺境を脅すので、およそ血気あるものは、みな髪を逆だてまなじりを決し、力を奮って一戦し、仇敵を倒さん誠意を披れさしようとする。今の計としては、一心協力して、これと決戦することあるのみで、このうえ容忍すれば、国の体面はどうなるだろう」¹⁷⁾

ここで「一心協力」といっているのは、湘淮兩派の共同工作を要望しているのである。彼が広東へ赴任した時、ひきいていった軍隊は、大部分左宗棠の集めた湘軍数営であり、一切の軍需物資はすべて湖南省からえていた。李鴻章は彼にほとんど大した援助はしていない。湘淮兩派の矛盾はいかにしても相容れないものであった。更に粵・滇辺境を守るための軍隊は、すべて湘（湖南）、皖（安徽）、楚（湖北）、粵の諸軍からなる雑兵で、武器も劣っている上に、糧食、軍用品も不足していたから、彭玉麟は広東についても、十分に指揮できず、山西・北甯などの諸重要都市は続々と陥落した。これは全く淮派の不協力の結果である。このようなありさまを見て、右春坊右庶子の錫鈞は速やかに張樹声を免職させ、これ以上の軍事上の誤りをさけるよう上奏した。

「張樹声は暗愚懦弱で、士卒の心を失い、その国防上の処置は甚だ拙劣で、しかも彭玉麟と意見が合わず、軍人たちから最も嫌われている。聞けば徐延旭が敗けたのを張樹声が救援しなかったせいになっているということだが、はたして真実でしょうか。彭玉麟と仲がわるいからには、おのずからそれが軍事上にも影響するから、早いうちに張の職を免じて、彭玉麟を兩粵の総督にして、軍務を指揮させるべきでないか、そうすれば兵力、糧食を徴発する際、軍政兩權が一に帰して、意の如く指揮しうるであろう」¹⁸⁾

この上奏文は兩派の矛盾をはっきりと暴いている。当時、張樹声自身も責任の重大さを感じており、刑部に処罰を願った。しかし、強大な淮派の勢力のもとに、清国政府はこの問題をうやむやにすませるより方法がなかった。

滇・粵辺境の事態が急をつけると、淮派の内部の軍閥にも大局の悪化を座視できないものがあらわれた。たとえば北甯が陥落する直前、吳大澂は自から淮軍四千人を率いて、守備につこうとした。しかし、李鴻章は直隸の兵力不足を理由にして、これに反対し、政府に勧告して、甘肅提督の曹克忠が新たに募集した烏合の兵を発して、越南を助けさせようとした。¹⁹⁾

1884（光緒10）年初夏、フランス軍は越南に猛攻を加え、清国は湘淮兩派の斗争のため、軍事上非常に不利な立場に立ち、危機は日益しに、はげしくなった。このような局面は李鴻章の主張にとって極めて有利であった。したがって、彼はデトリング（G. Detring）の仲裁をえて、フランス海軍司令官フルニエと和平交渉を行った。しかし曾紀沢は強硬な主張を堅持し、清国は軍事上の敗退を恐れ、土地を与えて、賠償するような和議を行ってはならないと強調していた。²⁰⁾

李鴻章は以前から、曾紀沢の駐仏公使の役目を奪おうとしていたが、主戦派の圧力のために実

現できなかった。いまや、彼は時至れりとし、一切を顧みず、総理衙門にせまり、1884年4月28日、曾紀沢を免職させ、淮派の李鳳苞を使臣として、パリにゆかせ、交渉を行なわせた。李鴻章はこうして外交上、軍事上に和平交渉に有利な条件を作ったのち、正式にフルニエと交渉し、この年5月11日天津で清仏仮条約五カ条に調印した。

この条約が成立した後、フェリー内閣は大いに満足の意を表明したが、清国の国内では李鴻章の売国政策を排撃するものが更に数を増した。清流派の張佩綸、鄧承修、劉恩溥らは一致して李鴻章の無能を罵倒した。²¹⁾ 光祿寺少卿の屠仁守もいっている。

「李鴻章のフルニエとの問答を調査したところ、彼はいつも中国が問題とするのは体制（清国と属国関係）にあり、区々たる越南にはないという。これほど無責任な発言はない。隸属国の滅亡を考えずに、体制も何もあったものでない。しかも、講和条件の五条は、越南の境界問題に一ことも言及せず、全面的にフランスに譲歩している観がある」²²⁾

左宗棠はこの時、病と称して、両江総督を辞しており、²³⁾ 時の政治に関与する力がなかったが、仮条約が北圻の利益を放棄し、国家の大計に関係していることを見、またこの条約に調印する際、李が彼に相談しなかったため、大いに憤慨した。

「越南の南圻と西貢など六省は、占領されて外国領となり、この国の良き部分はすでに失われ、情勢はいよいよ危急を告げたが、なお幸いにも北圻は維持されている。しかし北圻は広東・雲南の遮蔽の役をなし、わが国と領土を接し、種々の鉱物が豊富だから、フランス人が渴望すること久しく、もしそのまま放置すれば、必然の結果としてフランス人は隴をえて蜀を望むだろう。……だから勿論、戦争の決議をせねばならない」²⁴⁾

1884年6月23日、フランス軍は仮条約によって、諒山を占領したが、突然清兵の襲撃に遭い、多くの士卒が死傷した。フランス代理公使スマレ（Le Vicomte de Semallé）は清国政府の違約をとがめ、抗議を行い、²⁵⁾ 賠償を要求し、越南問題はまた緊張状態に入った。彼は海軍司令官クールベ（Courbet）に艦隊を率いて清国に来させるよう政府に要求した。

この時には清国政府も弱腰をみせず、湘派の曾国荃、彭玉麟らに命じて、東南沿海と滇・越辺境の防備を固めさせた。このような情勢は湘派勢力の擡頭に非常に有利であった。李鴻章も自分の意見を固執せず、ただ傍観的態度をとり、情況の悪化を待とうとした。彼は山海関、旅順および煙台各地の防衛を口実として、大量の弾薬、糧食を滇・粵防備軍に供給しようとはしなかった。実際には南方も北方も共に清国の一部であり、南方の軍事の失敗は、すなわち清国の軍事の失敗である。李鴻章がただ北方の防衛をのみ重視し、南方の防衛をゆるがせにしたことを見ても彼の考えは自ずと明らかである。もともと湘派の軍隊の大多数は滇・粵の辺境と東南沿海一帯にあり、しかも曾国荃、彭玉麟らはこれらの地域を防衛する責任を与えられていた。もし南方の軍

事が失敗すれば、湘派の無能を暴露することになり、李は機に乗じて、講和を唱えることができるわけである。当時、李鴻章は軍事上このような態度をとっただけでなく、外交上もやはり、座して機会をねらっていた。上海談判の時、彼が表に立とうとせず、曾国荃とフランス公使パテノートルを会談させたのも、そのあらわれに他ならない。

パテノートルは1884年7月1日越南から上海にかえり、曾国荃と会談したが、彼はこの時2億5千万フランの賠償要求を固執した。湘派は最初から賠償に反対していたのであり、パテノートルのこのような巨大な金額の提出に対して、曾国荃がこれをうけつけるはずがなかった。したがって、この交渉はついに決裂した。或は李鴻章はこの必然的な決裂でフランスを刺激し、フランスの武力によって湘派に打撃を与えようとしていたのかも知れない。フランス側も武力で主戦派に打撃を与えなければ、清国政府を屈服させることができないということを知っていた。こうして、この年の8月5日クールベは艦隊を率いて、基隆を占領し、まもなく福州に進撃し、何如瑋の率いていた福建水師を全滅させた。福州が攻撃される前に、軍機処は李鴻章に防衛に協力するよう命令を下している。

「仏艦は閩口（閩江河口地点）に集結したが、彼らは台湾で打撃をうけたから、福建を攻撃するかもしれない、船艦の増加こそまことに重要な措置である。北洋・南海とも現在急を告げておらず、しかもフランスはなお会談を希望しており、船艦を（閩口に）割愛しても、掠奪されることはあるまいから、李鴻章と曾国荃にそれぞれ軍艦二隻あて割愛されて、即刻福建に至らしめよ。大局の関するところ甚だ重大であって派閥の争いを止め、既成の考えもすてるべきである」²⁶⁾

当時、李鴻章は協力するどころか、座して失敗をまっていた。こうして、馬尾船廠は爆破され、福建水師は全滅させられるという悲劇が発生した。軍事上の失敗が重ねられれば重ねられるだけ、李鴻章の講和談判の希望は大きくなった。

台湾・福建が攻撃を受けて、湘派の損失は極めて大きかった。その上広東・広西の辺境の防衛も失敗し、鎮南関を守っていた淮派の軍閥潘鼎新²⁷⁾は戦わずして逃げ、全体の戦局は樂觀を許さなかった。この国家の存亡の別れ目にあって、幸にも彭玉麟は馮子材らに命じて、フランス軍と死斗させて諒山で勝利をえ、岑毓英と劉永福らも、前後して臨洮・宣光などの地を回復した。戦局がこういう状況となり、禍転じて福となる様相が濃厚であった。李鴻章はこのありさまを見て、戦勝に乗じて講和することを主張し、英人ハート（Robert Hart）とキャンベルの斡旋を通じ、正式に清仏条約に調印し、数年来の越南論争もここに一応の結末をみた。

この条約が成立する前、左宗棠・彭玉麟・張之洞らは挙ってこれに反対し、撤兵してから和議を行なうことは非常に危険であると考えた。彭玉麟はいう、

「要するに、講和は許してもよいが、こちらが先に軍隊を撤退してはならぬ。さもないと、諒山以北では、鎮南関にも扼すべき險なく、竜州には守るべき城がない、フランスが急に不逞の行為に出れば、防禦するによしなく、将来憂慮すべき事態は限りないものがある」²⁸⁾

しかし、和議を求める李鴻章はこれら湘派の猛烈な非難を完全に無視して、越南を割譲し、黒旗軍を駆逐するという清仏条約を成立させた。

注

- (1) 劉長佑「劉武慎公遺書」奏稿20卷，55頁上。
- (2) 故宮博物院「清光緒朝中法交涉史料」（以下単に中法交涉史料と称す）2卷，4頁「周德潤奏雲南鉞請師採弁母為法人覬覦片」中に次のようにいっている。
「調査によれば、雲南は五金ともに産し、『大清会典』の記載では、銀山の税額6万7千余両、銅山の税額1万8百余両、鉛と錫がこれに次ぎ、さらに金がこれに次ぐが、要するに銅が主要である。……また調査したところによれば、雲南省の塩井28区、毎年の製塩額37,106,000余斤。各区は毎年『塩道庫』に銀合せて1,043,400余両を送る。」
- (3) フェリーはフランス共和党の重要人物である。彼はフランスの資本家層の支持をうけて、前後二度（1880--81, 1883--85年）首相となり、極力海外に植民地を拡大することを主張した。だから清仏戦争の際も、彼はフランスの国務をみていたわけである。エンゲルス（Engels）は、フェリーは資産階級の代表者であり、植民地で悪どい搾取をしていると評している。
- (4) Billot, L' Affaire du Tonkin. p.38-41
- (5) 曾紀沢「曾惠敏公遺集」文集4卷，16—17頁。
- (6) 同上，文集5卷，9頁上
- (7) 「中法交涉史料」4卷，3—4頁。また唐燭は山西・北寧を守っていたが、凡庸無能であり、フランス軍の攻撃をうけて、戦わずして逃げ、鄧承修・延茂らの弾劾をうけた。
- (8) 曾國荃「曾忠襄公全集」書札卷16，37頁上。
- (9) 「中法交涉史料」3卷，28頁
- (10) 張佩綸「澗千集」書牘3卷，4頁上
- (11) Ministère des Affaires étrangères, Documents diplomatiques français (1871—1914), 1ère Série (1871—1900), Tome IV, N° 581, (13 mai 1881-20 février 1883)
- (12) Ministère des Affaires étrangères, Documents diplomatiques français (1871—1917), 1ère Série (1971-1900), Tome V, N°6, N°24, N°46.
- (13) 「李文忠公全集」電稿1，20頁
- (14) 「中法外交史料」4卷，24—25頁
- (15) 同上5卷，28頁
- (16) 同上6卷，13頁
- (17) 同上7卷，16頁
- (18) 同上12卷，19頁
- (19) 同上11卷，25頁
- (20) 同上13卷，23頁「曾紀沢致德國報館函」
- (21) 「中法交涉史料」15卷，4—5頁記載によれば、劉恩溥は李鴻章が曾紀沢の任を解き、和議を主張するのは、すべて自己の地位、名譽を保全せんがためであると攻撃している。また「翁文恭日記」の23冊目，29頁下によると，次のような記事がある。「旧曆甲申4月11日 翰林院代遞梁鼎芬の上奏文によれば，李鴻章の死刑を主張している。」
- (22) 屠仁守「屠光祿疏稿」2卷，19頁上

- (23) 1884年2月8日左宗棠は病気のため、休暇を請い、16日清政府は曾国荃を两江総督に任じて彼に代らせた。4月8日に左宗棠は正式に任務をひきわたり、北上して入京した。
- (24) 左宗棠『左文襄公全集』時務説帖、4頁上
- (25) アメリカのモース (H. B. Mores) は次のように論評している。天津仮条約が失敗したのは中国側に詐欺的行為があったからではない。これは一種の誤解であり、このような誤解はヨーロッパ人の焦燥とアジア人の遷延策のために生じたものである。
- (26) 「中法越南交渉資料」上
- (27) 潘鼎新は李鴻章の推薦をうけて、広西巡撫となったが、軍事的才能がなかった。1885年3月22日の彭玉麟の電信によると、「近頃ひそかに調査したところでは、鎮南関内外の軍事情況は、はなはだ憂慮すべき状態である。当地では潘氏を批判するものあまりに多く、遠方のことで確かめ得ないが、軍の意気おとろえ人心離反し、軍民たちは大に怒り、いまや辺防の事態は困難を加えている。潘氏は諸軍を制御することが拙く、才力に欠け軍の統率が意の如くならないから、もはや明らかに桂軍の士気が再び振うということは断じてむづかしい」（「中法越南交渉資料」中中）。
- (28) 「中法越南交渉資料」中中

曾紀沢の対仏政策

清仏戦争の際、曾紀沢は主戦を、李鴻章は講和を主張し、湘淮両派間に外交上激しい論争が起った。曾紀沢は清末の外交家であり、1876（光緒4）年10月31日、総理衙門は彼に郭嵩燾の職務をつがせて、駐英・仏公使に任命した。彼は郭嵩燾と同様に、当時の清国官僚の中では、比較的大局を見通す見識をもった人物であった。伊犁問題を解決した後、彼の名声はにわかに高まり、淮派の嫉妬を買ったのも自然の成り行きであったといえよう。今、彼の主戦政策を検討してみよう。

太平天国と捻軍が失敗してから、清国政府の軍事権は湘淮両派の軍閥の手中におちた。湘軍は糧食欠乏のため、後には大部分が解散された。淮軍は湘軍に続いておこり、徐々に大きな勢力をきずきあげた。清仏戦争の際、左宗棠・曾国荃が若干の湘軍を統率していたのを除いては、すべての軍事権が李鴻章一人の手ににぎられていた。李は自己の勢力を維持するため、絶対に淮軍を列強の砲火のもとに犠牲にしようとはしなかった。しかも、この時の淮軍は軍紀が極度に乱れ、士卒に斗志なく、フランス軍に対抗して勝利を得られるかどうかということは、大いに考える余地のある問題であった。曾紀沢もこの点に関しては、すでに憂慮していたのであるが、主戦を堅持する以上、どうしても「戦」を外交のうしろ盾としなければならなかったのである。¹⁾ もし列強の侵略に対して、少しの反抗をも行なわないならば、いいかえれば無条件に降服するなら、外交を進めるにもやりようがない。しかも、19世紀末は資本主義国家が狂気のように海外で植民地を争奪していた時期であり、彼らは寸を得れば尺を思い、弱きを挫き強きを恐れ、国際間にはいわず「正義」とか「公理」とかは全くなかった。侵略を受ける国家にとっては、武力で自己を守ることが唯一の正確なやり方であった。当時、湘派だけがこのような強硬な主張をしたのではなく、清流派の張佩綸もまたこのような見解をもっていた。張佩綸は李鴻章にあてた書翰中で「

勝敗」と「和戦」に関して、大体次のように言明している。

「越南問題について私は、すでに二回にわたって上奏したが、政府は私の建議に対し大いに不満の意を示した。……はじめは勝利を収め後に失敗するという貴下の考えは、あまりにも慎重にすぎる。勝・敗・和・戦いずれの場合も滅亡するだろうというが、勝利を得た場合は、必ずしも損失をうけるとは限らない。貴下の名声は内外に高く、貴下が国政を主宰しうるのもそのため、外国と交友を結びうるのもそのためであるが、一方、非難をうけねばならぬのもそのためである」²⁾

列強は偽瞞と威嚇を侵略の手段としている。この点に関しての曾紀沢の認識は、李鴻章のそれに比べてはるかに徹底していた。彼はフランスとの談判の最初からすでに、越南問題はもはや口先で何とかなる段階ではなく、ただ軍備を整えてフランスに対抗する他ないと考えていた。当時フランスはヨーロッパにおいてドイツと仇敵の關係にあり、アフリカ植民地の争奪戦から、イギリスともうまくゆかなかった。しかも国内政党の意見は一致せず、内閣も動揺を続けた。³⁾ もし清国が強硬な態度を堅持したならば、フランスは或は危険な侵略を敢えてしないかも知れない。彼は陳俊臣への返事でいう。

「仏・越問題は、仏側の久しき陰謀によるとはいえ、実はわが国が弱味を見せすぎたことから、醸成されたものである。目下、互いににらみ合って譲らず、一日一日が危機にある。我方もたしかに危急を告げているが、むこうも同様である。もし我方が譲らぬ決心を堅持して、一戦して敗れた場合は再戦をはかり、再戦して敗れた場合は、幾たびでも戦う覚悟であるならば、これはむこうが大いにおそれるところなのだ」

これは、清国が外交上決して侵略者に屈服してはならず、武力で自衛すれば必らず列強に打ち勝てる事を強調しているものである。

また彼は邵筱村への返事でいう。

「内外の人たちは、大てい李鴻章が主和派であり、私が主戦派だと言う。私をよく知ってくれている君は、きっとこの内情を見きわめることができよう。そもそも主戦と主和は、ことばこそ違え、その主旨に変わりはない。もし早く主戦派の言を採用しておれば、決して戦禍を招くに至らなかった。あまりに久しい間、慎重に構えていたばかりに、今日の戦禍を避けられなかったのである。」⁴⁾

越南交渉の経過とその後の結果からも、この曾紀沢の見解は非常に正確であったことがわかる。

フランスについていえば、全く曾紀沢のいうように財政は困難であり、大量の軍隊を東征させるということは、実際に不可能であった。⁵⁾ 清仏談判の時、フランスは国内情勢が不安であり、内閣人事にしばしば変動があり、対外政策も定めがなかった。1883年4月フェリーが越南の軍事

侵略費のため、下議院に550万フランの増加を要求した際も、激しい論争を経てはじめて受け入れられたのである。しかも、この年フランスはアフリカの植民地争奪のためマダガスカル (Madagascar) 島を砲撃し、またもやイギリスの不満を買っていた。このような情勢はフェリーが植民地政策を推行するのに、非常に不利であった。当時、ドイツ首相ビスマルク (Bismarck) は、駐ベルリン、フランス大使クールセル (De Courcel) に向って次のような意味のことを表明している。もしチュニス (Tunis)・マダガスカル・越南の諸問題が同時に爆発したなら、フランスにとって極めて重大な危機が訪れるだろう。フェリーが清国を屈服させるためには軍事費を大量増加し、1万5千人あまりの軍隊を派遣しなければならないであろうと。⁶⁾ 当時のフランスの兵力からいって、軍隊を増加して東進することは到底できないことであった。1884年冬、クールセルが台湾の淡水を攻めて阻まれた時、フェリーに直ちに3千の援兵を送ってほしいと要求したが、ついに国会の拒絶にあったのも、一つの証拠といえよう。⁷⁾ これらの事実からも、フェリーの内閣は越南に対して武力攻勢を惜しまなかったが、それには大きな困難があったことを、はっきり指摘できる。曽紀沢は以前からフランスのこのような弱点を察しており、パリでフェリー首相と越南問題について論じた時も、いささかの弱腰をも見せなかった。もし李鴻章が講和を固持せず、曽紀沢の外交と歩調をあわせ、積極的に軍備を整えて、フランスに対抗することができたなら、越南交渉は失敗することがなかったであろう。⁸⁾ イギリス内閣の地位の高い閣僚も清仏の衝突が正式の重大な戦争となるなら、フランスは最後には必ず失敗するであろうといっている。⁹⁾ このような見方は理由のないこととはいえない。

英・米・独・露各国は清仏戦争に対して、他人の災難をよろこぶ態度をとっていた。彼らは勿論フランスの敗戦を望まなかったし、だからといって、フランスの戦勝をも望まなかった。このような矛盾した心理は極めて微妙なものであった。というのは、もしフランスが敗北を喫するなら、これはヨーロッパ資本主義国家がアジアの一弱国に敗れたことになり、彼らが将来アジアに植民地を拡大し、経済的搾取を行なうのに極めて不利な影響を与えることになる。フランスがもし戦勝をうるなら、勢い清国において大きな利益を獲得することとなり、彼らにとって極めて不利である。こうして彼らは清仏両国が互角の勝負を行ない、彼らが、漁父の利をうることを望んだ。デトリング・ヤング (John R. Young)・ハートらの暗躍もまたこのためのものであった。越南交渉緊張の際には、いかなる国家の調停も無益であり、ただ清国自身が軍備を整えて侵略に抵抗し、かくてはじめて列強から損害を受けずにすむのである。張之洞はいつている。

「中国はもともと国民の安息や外国との友好を重んずる。況や、水害や軍需兵力の不足に直面しているのだから、軍隊の発動を軽々しく言うべきでない。それに、今日フランス・越南の時局に臨んで、戦争という手段よりないとは、どうしたことであろうか。わが国は劉永福を援助

し、フランス人は久しい前から中国に対して挑戦しようと明言しているし、況や、今日、清仏両軍はあきらかに交戦し、仏人側の死者も 少くない。かの国がもし 劉を滅し越南を併合すれば、必ずわが国に戦費の賠償をもとめ、雲南省に開港市場を求めるに違いない。もしはっきりと決裂し、戦って勝てない場合でも、戦費を要求し雲南省に開港場を求めるだけである」¹⁰⁾これは、戦争をすれば賠償金を支払わねばならず、講和を結んでも賠償金を支払わねばならぬ、だが戦争をしたからとて失敗するとは限らないから講和は戦争にしかず、ということである。このような見解は曾紀沢の主張と完全に一致しているといえる。湘派が外交上多数の人々の支持をえたのは、曾紀沢が当時の国際情勢にかんがみて列強と反撥したからであろう。

注

- (1) 「曾惠敏公遺集」に収める曾紀沢の李鴻章への書信には、次のようにいう。
「各省の軍隊を考えるに、訓練が十分にできておらず、急に強敵に遭遇すれば、勝利の見こみはないだろう。だから、軽々しく戦端を開きたくない。これは極めて重要な意見であり、国事を謀る忠臣は、古来みなそういうものだ。私（曾紀沢）は以前平和を維持するために実力をもって戦争の準備をしようとしたが、戦争を発動したくない気持は、終始貫下（李鴻章）と変らないのである」（胡伝鈞「盾墨留芬」三卷、41頁下にも節録されている）。
- (2) 「澗千集書讀」三卷、3頁上
- (3) 曾紀沢は1883年6月12日越南国王に書信を寄せていっている（「曾惠敏公遺集文集」五卷、7—8頁）。
「フランスが機をうかがっているのは、今に始まったことでなく、政府の要人や貿易商人たちは、それを一日も忘れていないにもかかわらず、だらだらと今日の情勢にたち至ったのは、フランスが内にして君民両党相争い、外にしては独・伊・奥三国と不和の関係であり、常に近隣列強の侵略をおそれ、遠征軍を送る余力がなかったからである」、（なお、駐独日本公使青木周蔵のメモにも同じ内容の記載がある）。
- (4) 「曾惠敏公遺集」文集卷五、12頁。
- (5) 「盾墨留芬」一卷、6頁下。
- (6) Ministère des Affaires étrangères, Documents diplomatiques français (1871-1917), 1ère Série (1871-1900), Tome V. N° 166,
- (7) Ministère des Affaires étrangères, Documents diplomatiques, Affaires de Chine et du Tonkin. 1884-1885 Paris, N° 155. P.174
- (8) ハートのキャンベルに送った電報中に（第163号）いっている。中国がもし強硬な態度を堅持するなら、戦争は長びき、ますます中国が勝利をうる公算は大になるであろう。（『中国海南与中法戦争』頁62収録）。
- (9) 同(6) N°21
- (10) 「中法交渉史」九卷、21頁

李鴻章の妥協外交

越南問題交渉の際、李鴻章は極力講和を主張した。このような妥協外交は清・露の伊犁交渉の時に早くもあらわれている。李鴻章が講和を主張する理由は、勿論数多いものではあるが、彼の上奏の中に特に強調されているのは、海防は边防より重要であるということである。¹¹⁾このような観点に立って、彼は伊犁・越南の諸辺疆問題に関して列強に譲歩するよう主張したのである。

1862年上海についた李鴻章は、その後各商港の豪商・外人と結託した。彼の権力と財産は沿海

地帯（上海・天津など）の都市に次第に強力な勢力をもつに至った。彼の淮軍が太平軍・捻軍を鎮圧した時、清国の国庫はからであり、財政は困難であり、淮軍の一切の経費はほとんど蘇滬厘金、江海関税、淮南塩厘で賄っていた。²⁾ 後には淮軍の糧食・弾薬などはこれの厘金（税金）と関税にたよって維持されることとなった。黄序鵬の「海関通志」によると、清仏戦争の時、清国の関税収入は毎年1,500余万銀両であり、洋薬（阿片）厘金400余万銀両を加えて、計2千万銀両程度となる。当時、江海関、粵海関、津海関などが最も重要な海関であり、輸入物資は阿片・棉布・棉紗が主であった。阿片の輸入年額は約7万箱であり、その税金はついに輸入物資中第一位をしめるに至った。³⁾ 最初阿片一箱の税金は数十両であったが、後に左宗棠が阿片を禁止することを主張し、一箱あたりの税を150両に引き上げようとしたが、イギリスのウェード（Wade T.）の反対にあい、成功しなかった。後に李鴻章の交渉によりはじめて一箱あたり110銀両の税をかけることになったものである。こうして計算すると、毎年770万両の阿片厘金がえられるはずであるが、脱税の関係で実際にはこの額には到達しない。李鴻章はこの阿片厘金をば淮軍を維持するための費用の一部にあてたのである。

1870（同治9）年、李鴻章が直隸総督となり通商大臣を兼任してから、淮派の買弁勢力は上海、南京より天津・北京にまでのび、津海関以外の東海関はすべて彼の手中におちた外、長蘆塩課もまた彼の統制をうけた。⁴⁾ 清仏戦争の時も、彼はこれらの関税・塩程で戦争もしない淮軍を養っていたのである。1884年夏、彼は軍費の不足を理由として湖北省の江漢関（税関）に援助を求めた。⁵⁾

当時、淮軍の軍事支出は巨大なものであり、北洋艦隊についていうと、毎月約17,760銀両を支給している。⁶⁾ また李鴻章の「淮軍報銷摺」の記載によると、1883年淮軍は陸海軍あわせて39カ大隊で直隸の各海口の要地に分駐したが、この一年、関厘（関税）・塩課並びに各省から集めた軍費は345万銀両に達し、軍隊に支給する他に、大量の余剰があった。⁷⁾ しかし彼は滇・越辺境の防衛に対しては、軍事費の不足を理由に協力しようとしなかった。

李鴻章は関厘・塩課並びに沿海各省からの収入以外に、多くの軍事的実業的な工場をつくった。これらの工場はほとんど沿海の数個の大都市に集中している。同光年間に彼の経営していた工場として、上海機器局、江南製造局、金陵機器局、天津機器局、招商局、開平鉱務局、天津電報局などが挙げられる。また、清仏戦争の時には、上海機器織布局をつくっている。これらの新興工業は大抵官民合営であり、資本の中では、李鴻章自身のものが最も多額をしめていた。こうして彼はこれらの工場をほとんど彼自身の私物のように扱った。左宗棠が福州船政局をつくったのは、淮派の江南製造局に対抗するためであるといわれる。クールベが福州造船廠を破壊したのは清国の船舶工業からいうと、非常に大きな損失であった。この造船廠が砲撃をうける前に、李

鴻章は明らかにその危険を知っていたのに、何らの保護対策を講じなかった。しかも彼自身が経営している招商局は、550万銀両でアメリカの旗昌洋行（Ruessell & Co）に売却して、損失を未然にさせている。⁸⁾

李鴻章はただ自己の利益のみをはかり、この利益はまた欧米資本主義国家の資本と一体となっていた。外国資本の支持がなければ、彼は洋務を発展させることはできない。上海・天津などの数個の大都市はみな欧米資本主義国家の勢力が最も早く侵入した地方であり、李鴻章が始めた工業はこれらの外国資本に依頼しているため、工場をこれらの都市に集中させないわけにはゆかなかった。これらの事実は、買弁官僚資本が沿海地帯と切り離せないものであることを物語っている。梁啓超はいつている。

「世人は李鴻章の富が天下に冠たることを喧伝しているが、これはほとんど信ずるに足りず、およそ資産数百万金というのが、われわれの見当である。招商局、電報局、開平煤鉱、中国通商銀行などの株は少くなく、一説に、南京、上海各地の質店、両替店は大てい彼の経営にかかるといふ」⁹⁾

上海、南京、天津などの地方は彼の生命線であり、もしこれらの地方も失なえば、彼は完全に破産し、彼の権勢・地位もまたこれに従って動揺するであろう。こうして彼は沿海地帯を特に重要視して、極力「海防」は「边防」より重要であると主張し、むしろ辺境の土地を割譲しようとも、沿海地帯を戦場にしようとはしなかった。

清仏戦争の際、李鴻章は懸命に講和を主張したが、湘派の圧力を受けたために、この主張を実現させることは非常に困難であつた。後に、清仏交渉が長引き、清国が勝利をうる可能性が大きくなったが、李鴻章は諒山の勝利に乗じて、フランスと和議を結び、清仏戦争を終結させた。彼はどのようにして和を求めるに急であつたのか。これは彼が戦争がこのうえ長引くなら、彼の買弁官僚資本が瓦解することを憂慮したからである。試みに二三の例をあげてみよう。江海関税務司のブレドン（R. E. Bredon）の報告によると、1881年の江海関の税収は上海開港以来の最高額に達している。しかし、清仏戦争の影響を受けて1882年になると、状況は変化し、税収は減少し、貿易は不振を来した。さらに1883年となると、更に不況となり、銀行の倒産は相つぎ、1884年10月には、沿岸が封鎖されたため、貿易商業は更に不振を来した。1885年初には上海その他多くの商港は崩壊の危険状態を呈した。¹⁰⁾

つぎに工業についていうと、天津機器局は創立以来年々利潤をあげていたが、1884年になると収支が引き合わなくなっている。¹¹⁾ このような不況は李鴻章の買弁官僚資本にとって極めて不利であつた。したがって、彼はできるだけ速かに戦争を終結し、一つには淮軍の損害を防ぎ、一つには買弁資本の倒産をくいとめようとした。当時、工科給事中の秦鍾簡は李鴻章を非難してい

っている。

「李鴻章は直隸總督になって以来、今日は船艦、明日は大砲、ここに砲台、あそこに要塞というように戦備をかため、毎年、国家の数百万金を費消しながら、外患あるごとに、ひたすら和議をはかっている。そもそも、外寇が襲来した場合、外海でこれに打撃を与えるのは、軍艦でなければならず、領土内で打撃を与えるのは、砲台でなければならない。李鴻章がこのような和議しか知らないのでは、艦船武器要塞は一たい何に使うのか。それに、和議なら誰だつてやれる。…李鴻章は資本を出して、揚子江岸や沿海などの到る処で、貿易をさせ、外国と戦端を開いて資本の損失を招くことを深くおそれ、だから断じて開戦をのぞまないのである」¹²⁾

このような批評は極めて正確であり妥当である。結局、買弁官僚と資本主義国家とは互に一致するものであり、清国の各商港は列強の経済侵略の根据地であり、李鴻章は彼らの庇護の下に洋務を行ない、貿易を経営し、絶対に彼らの助けを離れて独り立ちはできなかったのである。買弁官僚資本家はこのような依頼性・卑屈性をもっていたため、外交上強硬な態度に出られなかったのであろう。

注

- (1) 清光緒9年4月1日の「李鴻章密陳越南边防事宜摺」に見える（「中法交渉史料」巻4、3—4頁）。
- (2) 「李文忠公全集奏稿」3巻、71—75頁「関税留抵軍餉摺」或は同10巻、34頁「淮塩課厘半年収数摺」。
- (3) 夏燮「中西紀事」18巻「洋药上税」に次のような記載がある。
「1859（咸豊9）年より毎年の洋药の輸入は約6万箱、毎箱の課税銀30両、年収180万両、内地の商人に売る場合は、各処税関を通じて課税され、毎箱華税銀30両、厘金20両、上海、長江一帯の輸入は約3万箱、広州は1万2千箱、洋税のほかには課せられる華税・厘金は上海一帯において毎年150万両を徴収しうる」。
- (4) 「李文忠公全集奏稿」50巻、35—38頁「整頓鹽摺」中に、長鹽塩税は約70万銀両の収入があり、内20万両を軍需費にあてていると述べている。
- (5) 「李文忠公全集奏稿」50巻、40—41頁「請撥江漢関洋税摺」。
- (6) 同上49巻、15頁。
- (7) 同上52巻、35—37頁。
- (8) 招商局はこの時すでに大小20余隻の船舶をもち、資金は各省公款の80余万両の外、一般商人の株は四百数十万銀両をしめていた。（「李文忠公全集奏稿」50巻、45—49頁）。
- (9) 梁啓超「飲氷室專集之三」、85頁。
- (10) 中国近代経済史資料叢刊第4編「中国海関と中法戦争」、228頁。
- (11) 孫毓棠「中国近代工業史資料」第一輯（上）、367頁によると、1884年の収入は398、067銀両、支出は455、468銀両。
- (12) 「中法交渉史料」8巻、43—44頁。

宗主権問題をめぐる国際情勢

清仏戦争の際、清国内部には和戦両様の意見が対立し、軍事上外交上、統一した行動がとれず、後に外交上の大失敗を招いた。これに反して、フランスは清国自身の矛盾を利用し、きょうはくの手段をもって清国にのぞみ、ついに越南を占領した。¹⁾ もともと清仏交渉の際に問題にな

ったのは宗主権のことである。いわゆる宗主権とは、清国の属国に対する一種の儀礼的關係である。属国の君主は清国皇帝の封を受け、定期的に朝貢するが、清国はその内政外交には干渉しなかった。このような関係は近代法治国家の立場からみれば、極めて封建性を帯びるものであるが、属国と清国の間には長期にわたって平和と親交が保たれた。19世紀末に至り、列強はアジアを侵略したので、清国は諸属国の危険は勿論、自身もまた莫大な脅威を感じ、属国援助、清国防衛を強く主張した。

列強の外交方針は非常に現実主義的なもので、1874（同治13）年フランスは清国政府が外に目を向ける余裕のないのに乗じて、越南に迫って条約を締結し、それを独立国であると認めたが、実際には越南を自国の統治下においた。1882年、曾紀沢はフランスに向って抗議し、清国政府の越南に対する宗主権を強調した。フランスはこれをみとめないばかりでなく、1874年の越南における既得権を固持した。この問題については、後にフェリーと曾紀沢の間に論争があった。²⁾ 当時のフランスは李鴻章にはもはや一戦する勇気がなく、また曾紀沢と交渉しても結論をえられないと考えて、ますます積極的に軍事行動をとり、越南の武力抵抗を抑圧し、越南政府を屈服させようとした。この実際行動で既成の事実を作ってゆくやり方は、ますます明確に越南と清国政府との間の宗主関係をたち切るばかりでなく、1874年の条約中の權益を更に拡張しようとするものであった。1883年8月、フランス政府はクールベに軍艦七隻・陸戦隊千人を率いてほとんど防備のない順安城を攻撃させ、越南政府に対してフランスの提出した条約草案を24時間以内に受け入れなければ、更に攻撃をつづけると脅迫した。越南国王はフランスの砲火の脅迫のもとに、反抗する勇気もなく、やむなく越仏順化条約に調印した。この条約は1874年の条約より更にひどいものであり、越南の内政、外交、経済などの諸権はすべてフランに奪われ、完全にフランスの植民地となった。近代国際法から考えると、フランス政府はこの条約によって、更に完全に清国政府の宗主権を否定でき、その上、清仏交渉の際にも有力な口実とすることができる。

曾紀沢は1882年、越南政府に大臣を北京に派遣させ、清仏両国の友好関係を強化しようとしたが、当時、李鴻章は封建体制を遵守することしか知らず、属国の陪臣を北京に駐在させることはできないといって反対した。彼は秘密裡に越南に軍事援助を与えて、フランス軍に抵抗させた以外には、公式に両国関係に法律上の関係をつくろうとせず、ただ単に有名無実の宗主権だけを強調した。これでは到底、列強と抗争することは難かしかった。仏越順化条約が成立して、フランスは越南の侵略計画上非常に大きな成果をあげた。この後もフランスは清国との交渉を続けたが、その目的は今やどのように清越の辺境を分割し、黒旗軍を駆逐するかということである。

越仏順化条約の成立は、清越関係を実質的に断ち切っただけでなく、朝鮮問題の発生にも影響した。朝鮮も越南と同じく、清国の属国であり、フランスが越南に単独条約を迫り、清国の宗主

権を否定したからには、日本も同じく先例にならって、朝鮮に対する清国の宗主権を否定できるようになったからである。清仏両国が越南問題で論争している際、明治政府は機に乗じて、朝鮮問題をこじらせ始めた。

清仏戦争の際、日仏両国が同盟を結び、共同して清国を攻撃するだろうということが、清国でも朝鮮でも日本に於ても盛んにいわれた。いま両国の外交文献からみれば、日仏両国の同盟はなかったが、フランスは越南で、日本は朝鮮で、同様に清国の宗主権の問題にまきこまれていた。両国が互に同情するのは自然の成りゆきであった。この時、もしフランスが武力清国に打撃を与えれば、少なくとも清国政府を牽制して、朝鮮を考慮する余裕をなくさせるから、日本にとって極めて有利である。逆にフランスもまた、日本が朝鮮で事変を起し、清国政府をして越南問題で譲歩せざるをえなくさせるように希望した。だから、清仏戦争の際、フェリー内閣が明治政府との間に相互の援助を希望したことは自然であろう。³⁾

1883年3月5日、ブーレエの清国に対する軟弱な態度にあきたりないフランス外務大臣ラクールは、ブーレエを免職し、駐日公使のトリクを清国に派遣して、暫時その職務を代行させることにした。ブーレエと榎本武揚の間にはもとより緊密な接触が保たれていたのであるが、今や清国を去らんとするに当って、清国は越南に出兵するや否やに関して、榎本公使の意見をたずねた。榎本は大体次のように表明した。

「李鴻章の部下の洋式淮軍の実数は一万余にすぎず、北京の神機營の洋式の装備を施した軍隊も二万余にすぎない、その他各省の地方軍にあつては、銃砲もそろわず、軍紀は極度に乱れている。たとい清国が大いに開戦を唱えたとしても、それは単に口頭の宣伝にすぎず、実行は大変むつかしいであろう。しかも、朝鮮・越南両事件は日仏両国は密切な関係があるのであるから、清国の対越南策の情報があれば、私は必ず貴国に提供しよう」⁴⁾

このような表示はいうまでもなく、フランスに協力しようというものである。

トリクが日本を去って清国に向う時、フランス外相は次の二点に注意するように指示した。一、フランスの越南における既得権を守ること。一、清国の意図と準備を調査すること。⁵⁾ 彼は上海につき、李鴻章と前後二度会談したが、李の和戦いずれかの真意をつかめなかった。彼はそこで北京駐在公使の榎本に手紙をかき、代って清国の真意と陸海軍動員の状態を調査してくれるように依頼した。この依頼状は上海駐在総領事品川忠道の手を経て榎本に渡された。榎本公使はこれをうけとったが、一面識もないトリク自身が、このような唐突な請求をしたのかどうか疑った。しかし、結局は清国は敢えて開戦しないだろうという情報と、北洋海軍の活動状況をトリクにしらせた。⁶⁾ トリクはこの情報をバリーに伝えた。かくして、フランス政府は大胆にもクールベに陸海軍を統率させ、順安城に迫り、越南を脅迫して、順化条約に調印させたのではないかと考

える。

順化条約が成立して、越南は實際上、正式にフランスに併呑された。このニュースが日本にとどくと、井上馨はフランス駐日代理公使に熱烈な慶祝の意を表明し、フランス側もまた、池田・小泉ら日本の陸軍士官がフランスのために戦争に加わってくれたことを感謝している。井上はフランス公使との会談中、清国政府が越南と朝鮮において主張する宗主権は有名無実のものであり、越南を占領した今日、フランスは政治上でも、地理上でも、日本により接近したことになり、以後両国は更に互助提携し、相互の関係を強化しなければならないと言明した。⁷⁾

1884年クールベが清国の東南沿海を砲撃し、情勢が急を告げた時、明治政府は機に乗じて、朝鮮に甲申の変を起こした。事変の後、井上馨が朝鮮に渡り、交渉を行なうに当って、彼は呉大澂がこの会議に参加することを拒絶し、朝鮮が単独で日本と条約を締結するように迫った。この事は、江華条約および済物浦条約より更に一步進んで、清国の宗主権を否定してしまったということである。

注

- (1) たとえばフランス海軍司令官フルニル密函「中法交渉史料」13巻、24頁
- (2) Ministère des Affaires étrangères, Documents diplomatiques Français (1871~1917). Ière Série (1871-1900), Tome V. No. 50.
- (3) 明治17年12月19日・20日安藤上海領事ヨリ井上外務卿宛の電信2通（日本外務省蔵）
Ministère des Affaires étrangères. Documents diplomatiques. Affaires de Chine et du Tonkin, 1884-1885. Paris, 1885. No.155, p.174.
- (4) 「日本外交文書」16巻、467—468頁
- (5) Ministère des Affaires étrangères. Documents diplomatiques Français (1871~1917). Ière Série (1871-1900). Tome V. No. 36.
- (6) 「日本外交文書」16巻、500—501頁
- (7) 同上、587—589頁（明治16年9月1日井上外務卿仏国代理公使対話書）

むすび

清仏間の交渉の際、湘派が主戦を唱えたのに対して、淮派は講和を唱え、清末官界に未曾有の混乱状態を引きおこした。対仏抵抗という点から見ると幾分湘派の方が進歩的である。近代的装備をもった北洋陸海軍は李鴻章一人の手中に握られており、彼は自身の財産を保つため、講和を主張した。こうして清国の対仏交渉は戦かうこともできず、和することもできぬジレンマにつきあたった。これは反帝斗争に大きな悪影響を与えた。当時の内閣学士周徳潤はいう。

「ひそかに考えるのに、中国の外夷に対する防禦のみちは、ただ『戦う』か『戦わぬ』かの両言で決する。『戦う』と『戦わぬ』の中間にあつて中立が許されるということは断じてない。

例えば、仏越交戦問題の如きは、朝廷が深く将来を憂慮するために、ランスフに対する防禦と明言せずに、わざと遠まわしに辺境防備をなし、また越南救援だと明言せずに、わざと事実を秘めてこっそり援助している。予め和議の余地を残してはいるが、戦うべきなら戦うというきざしが言外に微かにうかがわれ、ただ天子の心をはかりかねて、辺境の官吏は決裁できず、結局いずれの意向に従うべきかわからずに、なすすべを失った状態である」¹⁾

クールベガ福建水師に開戦を通告した時、何如璋は和局を破ることを恐れて、傍観の態度をとり、艦隊を動かして防禦しようとはしなかったといわれている。こうして、海戦が始まると、大小11隻の艦隊は二時間にしてクールベに殲滅せられた。唐炯・潘鼎新らが越南で敗れたのも、或は和局の継続に執着したためかも知れない。

1882年曾紀沢がフランスに抗議を行なったときも、フランス政府内部の越南問題に対する考えは一致せず、しばしば内閣が倒れた。フェリーが組閣して後は、植民地政策を堅持する態度を明らかにし、一部商業資本家の支持をうけ、国会操縦に成功し、全力をあげて海外発展にうちこめるようになった。これに対し清国では越南問題の発生後、湘淮両派の論争は絶えることなく、後になるほど尖鋭化した。したがって、フェリーはこの両派間の矛盾を利用して侵略の陰謀をすめたのである。諒山事変の後は清国政府も完全に対仏開戦の腹をきめたが、李鴻章は上海でいたずらに傍観の態度をとり、広東にゆき督軍しようとせず、フランスに軍事上何らの牽制をもあたえず、越南政府はまもなくフランスに屈服した。

鎮南関の戦闘の際に、馮子材は広東、広西の寄せ集めの軍隊を指揮し、短刀や長矛を使ってフランス軍を大敗させている。もし洋式装備をもっている淮軍が必死の抗仏運動をつづけたなら、清国が勝利を占める可能性は非常に大きい。李鴻章は勝ちに乗じて和平を求めるという原則をふりかざして、独断で天津条約を締結し、越南をフランス植民地として認め、黒旗軍をも駆逐した。清仏の天津条約締結の際、フランスは賠償問題では譲歩したが、この戦いによる清国の損害は非常に大きなものであった。「清財政略考」の記述によると、1884年1年間で清政府の軍事消耗は1,500万銀兩に達し、その他、福州造船所と福建水師の破壊、数千の将兵の死傷など、損害を計るべからざるものがある。

梁啓超は、軍人出身の李鴻章がただ「夷を以て夷を制するを知るのみにして、結果たるや、まだ嘗てその効を収めず」

といっている、²⁾ 私はこのような批評では十分でないと思う。李鴻章は買弁官僚・地主・軍閥の三つの性格をもち、なかでも買弁官僚としての性格が最も顕著である。この故に、彼は欧米の資本家と一体となって、彼らの勢力にたよって自己の地位を強化することができたのである。湘淮両派の斗争において、淮派が湘派を圧倒しえたのは、淮派の買弁官僚が湘派のそれに較べて買

官僚として徹底していたからである。

注

(1) 「中法交渉史料」7巻、10頁

(2) 「飲氷室專集之三」、67頁